

【 復活讃詞 第5調 】

しんじゃよ、ちちとせいしんとともにはじめ
 信者 父 聖 神 共 始

なきことばわがすくいのため
 言 吾 救 爲 に

どうていぢょよりうまれしものをほめうとうて
 童 貞 女 生 者 讃 歌

おがむべし、かれあまんじてそのみにて
 拜 彼 甘 其 身

じゅうじかにのぼりしをしのびそのこ
 十 字 架 上 死 忍 其 光

うえいのふくかつにてしせしものを
 榮 復 活 死 者

ふくかつせしめたまえばな
 復 活 給 え ば な り。

【 天軍首祭の讃詞 第4調 】

てんぐんのしゅちょおよ、われらふとうのもの
 天 軍 首 長 我 等 不 當 者

はつねになんぢらにいのる、なんぢらのきと
 常 爾 等 祈 爾 等 祈 禱

うをもおつて、そのむけいのこうえいの
 以 其 無 形 光 榮

つばさのおお いにて われらをふせぎてま
翼 お庇 蔭 我 等 防 護

もりたま あ え、けだしわれらねっせつに
給 蓋 我 等 熱 切

ふふくしてよ ぶ、うえなるぐんのしゅちよ お
俯 伏 呼 上 軍 首 長

として、われらをきなんよ りすくいた給
我 等 危 難 救 給

ま え。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

こうえいはちちとこ と せいしんにき
光 榮 父 子 と 聖 神 歸

す、

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリスト スのえきしゃ、せい
實 神 智 役 者 聖

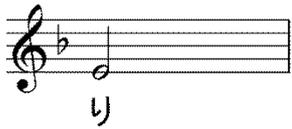
なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい
神 撰 笛 愛

にみちた るうつわ、わがくにのこう
満 器 我 國 光

しよ お しゃ、 あしとしゆきょうせいニコライ
 照 者 亜使徒主教聖
 よ、 なんぢのぼくぐんのため あめ、 および
 爾 羊 群 爲 及
 ぜんせかいのため、 いのちをたもうせい
 全世界 爲 生命 賜 聖
 さんしゃにいのりたまえ。
 三者 祈 給

【 天軍首のコンダック 第2調 】

いまもいつもよよに、アミン。
 今 何時 世 世
 かみのてんぐんしゆ、しんせいなるこうえいのえ役
 神 天軍 首 神聖 光 榮 役
 きしゃ、およびひとびとのきょうどうしゃあ
 者 及 人 人 教 導 者
 よ、われらのためにえきあることとおおい
 我 等 爲 益 事 大
 なるあわれみとをもとめたまあえ、なん
 憐 求 給 爾
 ぢらはむけいのぐんしゆちょうなればなあ
 等 無 形 軍 首 長



司祭) (黙誦： ^{せい かみ せいじゃ うち いこ} 聖なる神、^{せいさん こえ もつ かしょう} 聖者の中に息い、^{せいさん こえ もつ かしょう} セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
^{さんえい} ヘルヴィムより ^{ことごと} 讚榮せられ、^{てんぐん} 悉くの天軍より ^{ふくはい} 伏拝せられ、^{ばんぶつ む ゆう} 萬物を無より有と
^{ひと なんぢ ぞう しょう} なし、人を ^よ 爾の像と ^{つく} 肖とに依りて造り、^{なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ} 爾が諸の賜を以て之を飾り、
^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す} 願う者に智慧と明悟とを與え、^{そのすくい ため つうかい} 罪を行^すう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
^{た われらいや} を立て、我等卑しくして ^{ふとう} 不當なる ^{なんぢ しょぼく} 爾の諸僕を、^{こ とき おい} 此の時に於ても、^{なんぢ せい} 爾が聖な
^{さいだん こうえい まえ た} る祭壇の光榮の前に立ちて、^{なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た} 爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち} なしし主宰よ、^{せいさん うた う なんぢ じんじ} 爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう} 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、^{つみ ゆる わ たましい からだ} 我が靈と體と
^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと} を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ ^{え たま せい} 給え、聖なる
^{しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な} 生神女と古世より ^{しよせいじん きとう よ} 爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) ^{けだしわ かみ なんぢ せい} 蓋我が神よ、^{われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ} 爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、



ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ゅ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
 常 生 者 我 等 憐
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖 神 聖 勇 毅
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れめよ。こうえいはちちとことせいしん神
 光 榮 父 子 聖 神
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 歸 今 何 時 世 世
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 聖 神 聖 勇
 き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 毅 聖 常 生 者 我 等
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第5調 及び天軍首の第4調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、



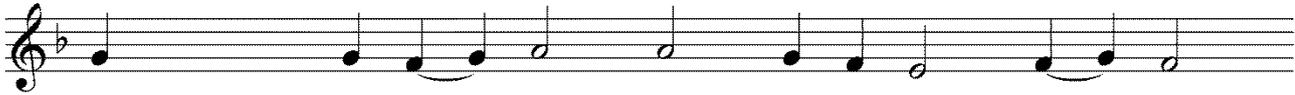
なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) プロキメン、^{しゅ} 主よ、^{なんぢ} 爾は我等を保ち、^{われら} 我等を護りて、^{たも} 斯の世より^{われら} 永遠に^{まも} 至らん、^こ ^よ ^{えいえん} ^{いた}



しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
主 爾 我等 保 我等 護



りて、このよおよりえいえんにいい
斯 世 永 遠 至



たらん。

誦經) ^{しゅ} 主よ、^{われ} 我を救い^{すく} 給え、^{たま} 蓋^{けだしぎじん} 義人は絶えたり、^た



しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
主 爾 我等 保 我等 護

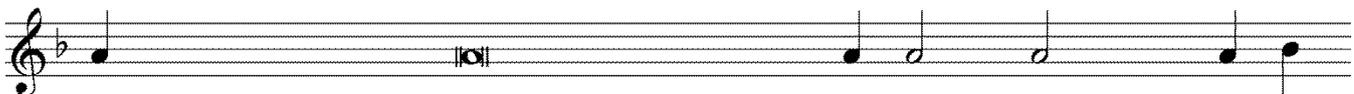


りて、このよおよりえいえんにいい
斯 世 永 遠 至



たらん。

誦經) ^{なんぢ} 爾は^{そのししゃ} 其使者を以て^{もつ} 風と爲し、^{かぜ} 其^な 役者を以て^{そのえきしゃ} 火燄と爲す。^{もつ} ^{ほのお} ^な



なんぢはそのししゃをもってかぜとなし、その
爾 其 使者 以 風 爲 其



えきしゃををもってほのおとなす。
役 者 以 火 燄 爲

【 使徒經 (アポストロス) 215 端 ガラティヤ書 6 章 11 節～18 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パウエルがガラティヤ人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、視よ、我手づから爾等に幾許が多く書したるを。肉を以て誇らんと欲する者

が、爾等を強いて割禮を受けしむるは、唯ハリストスの十字架の故に由りて窘逐を受け

ざらん爲のみ。蓋割禮を受くる者は、己も律法を守らず、然るに爾等に割禮を受

けしめんことを欲するは、爾等の肉を以て誇らん爲なり。我に在りては、我等の主イ

ス・ハリストスの十字架の外に誇る所なし、此に由りて世は我等の爲に釘せられたり、

我世に於ても亦然り。蓋ハリストス・イイスに在りては、割禮を受くるも、割禮を受け

ざるも益なく、惟新なる受造物は益あり。凡そ此の規に遵いて行ふ者は、願わく

は平安と慈憐とを蒙らん、神のイスライリも亦然り。今より後人我を擾す勿れ、

蓋我は主イイスの瘡痕を我が身に負えり。兄弟よ、願わくは我等の主イイス・ハリス

トスの恩寵は爾等の神と偕に在らんことを、アミン。

(比較用 口語訳)

兄弟たちよ。ごらんなさい。わたし自身いま筆をとって、こんなに大きい字で、あなたがたに書いて
いることを。いったい、肉において見えを飾ろうとする者たちは、キリスト・イエスの十字架のゆえに、
迫害を受けたくないばかりに、あなたがたに於いて割禮を受けさせようとする。事実、割禮のあるもの
自身が律法を守らず、ただ、あなたがたの肉について誇りたいために、割禮を受けさせようとしている
のである。しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするもの
は、断じてあってはならない。この十字架につけられて、この世はわたしに対して死に、わたしもこの
世に対して死んでしまったのである。割禮のあるなしは問題ではなく、ただ、新しく造られることこそ、
重要なのである。この法則に従って進む人々の上に、平和とあわれみとがあるように。また、神のイス
ラエルの上にあるように。だれも今後は、わたしに煩いをかけないでほしい。わたしは、イエスの焼き
印を身に帯びているのだから。兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの
霊と共にあるように、アアメン。

【 使徒經 (アポストロス) 305 端 エウレイ書 2 章 2 節～10 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、若し天使等に藉りて告げられし言は堅く立ちて、凡の違背と不順とは公正

の報を受けしならば、我等此くの如き救を願みずして、如何ぞ迫るるを得ん。斯れ始

主に因りて傳えられ、彼より聞きし者に因りて我等の中に堅く立てられ、神に縁りて、其

旨に循いて、休徴、奇蹟、種種の異能、及び聖神の分予を以て證せられたり。

蓋神は我等が言う所の未來の世を天使等に服せしめしに非ず、然れども或人一篇

に證して曰えり、人は何物たる、爾之を憶うか、人の子は何物たる、爾之を願

みるか。爾彼を天使等より少しく遜らしめ、彼に光榮と尊貴とを冠らせ、彼を爾が

手の造りし者の上に立て、萬物を其足下に服せしめたりと。既に萬物を彼に服せしめ

たれば、乃一も彼に服せざりし者を遺さざりき。然れども今我等は未だ萬物の彼に

服せられしを見ず、唯我等は天使等より少しく遜らしめたるイイススが、死を受くる爲に、

光榮と尊貴とを冠らせられたるを見る、彼が神の恩寵に由りて、衆人の爲に死を嘗

めん爲なり。蓋萬物の本づく所、萬物の歸する所の者が、多くの子を光榮に導

きて、彼等の救の君として、苦を以て成全せしむるは、宜しきに合えり。

(比較用 口語訳)

兄弟たちよ。御使たちをとおして語られた御言が効力を持ち、あらゆる罪過と不従順とに対して正当な報いが加えられたとすれば、わたしたちは、こんなに尊い救をなおざりにしては、どうして報いをのがれることができようか。この救は、初め主によって語られたものであって、聞いた人々からわたしたちにあかしされ、さらに神も、しるしと不思議とさまざまな力あるわざとにより、また、御旨に従い聖霊を各自に賜うことによって、あかしをされたのである。いったい、神は、わたしたちがここで語っているきたるべき世界を、御使たちに服従させることは、なさらなかった。聖書はある箇所、こうあかししている、「人間が何者だから、これを御心に留められるのだろうか。人の子が何者だから、これをかえりみられるのだろうか。あなたは、しばらくの間、彼を御使たちよりも低い者となし、栄光とほまれとを冠として彼に与え、万物をその足の下に服従させて下さった。」「万物を彼に服従させて下さった」という以上、服従しないものは、何ひとつ残されていないはずである。しかし、今もなお万物が彼

に服従している事実を、わたしたちは見ていない。ただ、「しばらくの間、御使たちよりも低い者とされた」イエスが、死の苦しみのゆえに、栄光とほまれとを冠として与えられたのを見る。それは、彼が神の恵みによって、すべての人のために死を味わわれるためであった。なぜなら、万物の帰すべきかた、万物を造られたかたが、多くの子らを栄光に導くのに、彼らの救の君を、苦難をとおして全うされたのは、彼にふさわしいことであったからである。

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第5調 及び天軍首の第2調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

Arieleia, Arieleia,

Arieleia.

誦經) ^{しゅ われなが なんぢ じれん うた わ くち もつ よよ なんぢ しんじつ った} 主よ、我永く爾の慈憐を歌い、我が口を以て世に爾の眞實を傳えん、

Arieleia, Arieleia,

Arieleia.

誦經) ^{しゅ ことごと てんし しゅ ほ あ} 主の悉くの天使よ、主を讃め揚げよ、

Arieleia, Arieleia,

Arieleia.

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ ところ かみ し ちえ いきぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

め ひら なんとち ふくいん おしえ さと たま わ うち なんとち ふく いましめ
 の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を
 おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんとち よろこ ところ
 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所
 おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
 を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、
 なんとち わ たましい からだ こうしょう われらなんとち なんとち むげん ちち しせいしぜん
 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし
 いのち ほどこ なんとち しん こうえい けん いま いつ よよ
 て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書39端 8章41～56節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イアルと名づくる人にして、會堂の幸たる者、來りてイ

スの足下に俯伏し、其家に入らんことを求めたり、蓋彼に獨の女、年約十二

の者ありて、今死せんとせり。彼が行く時、民之に擁し逼れり。十二年血漏を患うる

婦、醫師の爲に其悉くの所有を費したれども、一人にも痊さるるを得ざりし者は、

後より就きて、彼の衣の裾に捫りしに、其血漏直に止れり。イイスス曰えり、誰か

我に捫りたる。衆の認めざる時、ペトル及び彼と偕に在りし者曰えり、夫子、民爾

を繞りて擁し逼るに、爾は誰か我に捫りたると謂うか。然れどもイイスス曰えり、我に捫

りし者あり、蓋我能の我より出でしを覺えたり。婦は自ら隠す能わざるを見て、

おのの ^{きた} ^{かれ} ^{まえ} ^{ふふく} ^{かれ} ^{さわ} ^{ゆえ} ^{またいか} ^{たちどころ} ^{いや}
 戦 きて 来り、彼の前に俯伏して、彼に捫りし故、又如何にして 立 に愈されしを、
^{かれ} ^{しゅうみん} ^{まえ} ^つ ^{かれ} ^{これ} ^い ^{むすめ} ^{こころ} ^{やす} ^{なんぢ} ^{しん} ^{なんぢ}
 彼に衆 民の前に告げたり。彼は之に謂えり、女 よ、心 を安んぜよ、爾 の信は 爾
^{すく} ^{あんぜん} ^ゆ ^{かれ} ^{なお} ^い ^{とき} ^{かいどう} ^{つかさ} ^{いえ} ^{ひときた} ^{いわ} ^{なんぢ}
 を救えり、安 然として往け。彼が尚言う時、會 堂の 宰 の家より人 来りて曰く、 爾
^{むすめ} ^す ^で ^し ^し ^{わづら} ^{なか} ^{これ} ^き ^{つかさ} ^{こた} ^い ^{おそ} ^{なか}
 の 女 已に死せり、師を 煩 わす 勿れ。イスス之を聞きて、宰 に答へて曰えり、懼るる 勿
^{ただしん} ^{かれ} ^{すく} ^{いえ} ^{きた} ^{およ} ^{しょうぢよ} ^ふ
 れ、惟 信ぜよ、彼は救はれん。家に来りて、ペトル、イオアン、イアコフ、及び 少 女 の父
^ぼ ^{ほか} ^{たれ} ^い ^{ゆる} ^{しゅうじん} ^{ため} ^な ^{かなし} ^{かれ} ^い ^な ^{なか}
 母の外、誰にも入ることを許さざりき。衆 人 爲に哭き 哀 めるに、彼曰へり、哭く 勿れ、
^{かれ} ^し ^{あら} ^{すなわち} ^い ^{ひと} ^{びと} ^{その} ^し ^し ^{かれ} ^{あざ} ^{わら} ^{かれ} ^{しゅう}
 彼は死せしに非ず、乃 寝ぬるなり。人人 其死せしを知りて、彼を 晒 えり。彼 衆 を
^{そと} ^{いだ} ^そ ^て ^と ^よ ^い ^{しょうぢよ} ^お ^{その} ^{しん} ^{かえ} ^{ただ} ^ち ^お
 外に出して、其手を執りて、呼びて曰えり、少 女、起きよ。其 神 返りて、直 に起きた
^{かれ} ^{これ} ^{しょく} ^{あた} ^{めい} ^{その} ^ふ ^ぼ ^{おどろ} ^{かれ} ^ら ^{いま} ^し ^{おこ} ^な
 り、彼は之に 食 を與えんことを命ぜり。其 父母 駭 きたり、イスス彼等に 戒 めて、行
^{こと} ^{ひと} ^つ ^{なか}
 われし 事 を人に告ぐる 勿らしめたり。

(比較用 口語訳)

その時、そこに、ヤイロという名の人 came。この人は会堂司であった。イエスの足もとにひれ伏して、自分の家においでくださるようにと、しきりに願った。彼に十二歳ばかりになるひとり娘があったが、死にかけていた。ところが、イエスが出て行かれる途中、群衆が押し迫ってきた。ここに、十二年間も長血をわずらっていて、医者のために自分の身代をみな使い果してしまっていたが、だれにもなおしてもらえなかった女がいた。この女がうしろから近寄ってみ衣のふさにさわったところ、その長血がたちまち止まってしまった。イエスは言われた、「わたしにさわったのは、だれか」。人々はみな自分ではないと言ったので、ペテロが「先生、群衆があなたを取り囲んで、ひしめき合っているのです」と答えた。しかしイエスは言われた、「だれかがわたしにさわった。力がわたしから出て行ったのを感じたのだ」。女は隠しきれないのを知って、震えながら進み出て、みまえにひれ伏し、イエスにさわった訳と、さわるとたちまちなおったこととを、みんなの前で話した。そこでイエスが女に言われた、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」。イエスがまだ話しておられるうちに、会堂司の家から人がきて、「お嬢さんはなくなられました。この上、先生を煩わすには及びません」と言った。しかしイエスはこれを聞いて会堂司にむかって言われた、「恐れることはない。ただ信じなさい。娘は助かるのだ」。それから家にはいられるとき、ペテロ、ヨハネ、ヤコブおよびその子の父母のほかは、だれも一緒にはいって来ることをお許しにならなかった。人々はみな、娘のために泣き悲しんでいた。イエスは言われた、「泣くな、娘は死んだのではない。眠っているだけである」。人々は娘が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑った。イエスは娘の手を取って、呼びかけて言われた、「娘よ、起きなさい」。するとその霊がもどってきて、娘は即座に立ち上がった。イエスは何か食べ物を与えるように、さしずをされた。両親は驚いてしまった。イエスはこの出来事をだれにも話さないようにと、彼らに命じられた。

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書 51 端 10 章 16～21 節 】

しゅ そのもと い なんぢら き もの われ き なんぢら こぼ もの われ こぼ われ
 司祭) 主は其門徒に曰えり、爾等に聴く者は我に聴く、爾等を拒む者は我を拒む、我を
こぼ もの われ つかわ もの こぼ しちじゅうもんとよろこ かえ い しゅ なんぢ な
 拒む者は我を遣しし者を拒むなり。七十門徒喜びて返りて曰えり、主よ、爾の名
よ まき われら ふく かれ これ い われ いなづま ごと てん お み
 に因りて魔鬼も我等に服す。彼は之に謂えり、我サタナの電の如く天より隕ちしを見た
み われなんぢら へび さそり およ ことごと てき ちから ふ けん あた いつ なんぢら がい
 り。視よ、我爾等に蛇、蠍、及び悉くの敵の能を踐む權を與う、一も爾等を害
しか あくき なんぢら ふく よろこび な なか すなわちなんぢら な てん しる
 せざらん。然れども悪鬼の爾等に服するを喜と爲す勿れ、乃爾等の名の天に録さ
よろこび な そのとき しん もつ よろこ い ちち てんち しゅ われなんぢ さん
 れしを喜と爲せ。當時イイスス神を以て喜びて曰えり、父、天地の主よ、我爾を讚
えい なんぢこれら ちしやおよ たつしや かく これ せきし あらわ よ ちち しか けだし
 榮す、爾此等を智者及び達者に隠して、之を赤子に顯ししに因る、父よ、然り、蓋
か ごと なんぢ むね よみ ところ
 是くの如きは爾の旨の嘉せし所なり。

(比較用 口語訳)

主は七十二人に言われた。「あなたがたに聞き従う者は、わたしに聞き従うのであり、あなたがたを拒む者は、わたしを拒むのである。そしてわたしを拒む者は、わたしをおつかわしになったかたを拒むのである」。七十二人が喜んで帰ってきて言った、「主よ、あなたの名によっていただきますと、悪霊までがわたしたちに服従します」。彼らに言われた、「わたしはサタンが電光のように天から落ちるのを見た。わたしはあなたがたに、へびやさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ權威を授けた。だから、あなたがたに害をおよぼす者はまったく無いであろう。しかし、霊があなたがたに服従することを喜ぶな。むしろ、あなたがたの名が天にしるされていることを喜びなさい」。そのとき、イエスは聖霊によって喜びあふれて言われた、「天地の主なる父よ。あなたをほめたたえます。これらの事を知恵のある者や賢い者に隠して、幼な子にあらわしてくださいました。父よ、これはまことに、みこころにかなった事でした。

しゅ よ 、 こう え い は なんぢ に き し 、 こう え い
主 光 榮 爾 歸 光 榮
は なんぢ に き す 。
爾 歸

※聖体礼儀3 (金口イオアン) へ